# ヘレニズム概念と古代の歴史家（二）

## ――カルディアのヒエローニュモス――

田中穂積

### はじめに

ギリシア都市カルディアの出身であったヒエローニュモスは、前四世紀後半から、前三世期前半にかけて活躍した史家で、経歴については一二、叙述については一八の断片が知られている(1)。それらの断片から、彼はアレクサンドロス大王の没後からヘレニズム諸王国の形成にいたる歴史、いわゆるディアドコイ時代の歴史を叙述したことが知られ、またその著作を後代の史家たちが重要な史料として利用したこともうかがえる。しかし、彼の著作を知るためには、現存断片だけでは史料上、十分とはいえない。

そこで早くから、ヒエローニュモスの著作について論議がなされてきた。ことに、一八七六年には、現在のヒエローニュモス研究につながる基本的な見解がみられた。W・ニッシェはディアドコイ史の史料的典拠はドゥーリスではなく、ヒエローニュモスに求められること、さらにF・ロイスはこのことを踏まえたうえで、ディオドーロスの記述ならびに他の古代の記述を比較検討し、それによってヒエローニュモスの著述の再現を試み、以後の研究に影響を及ぼした。他方、J・G・ドロイゼンは、ディアドコイ時代の歴史はドゥーリスが先に書き、それをヒエローニュモ

スが批判する形で後から書き上げたとみた(2)。

以後の研究について要約すれば、F・ヤコビは従来の研究を展望し、ディオドーロスの記述はヒエローニュモスのそれを直接受け継ぐものとみて、そこからヒエローニュモスの著述の内容を引き出そうとした。また、ヒエローニュモスがトゥーキュディデースやポリュビオスに似たタイプの史家であったことを示唆している。R・シューベルトは、ヒエローニュモスが用いた史料の種類やヒエローニュモスの歴史記述の態度等について詳しく論じ、このあと、T・S・ブラウンは、ニッシェの見解に依りながら、史家としてのヒエローニュモスの立場を考察した。G・デ・サンクティスは、ロイスの説を取り上げ、ディオドーロス『文庫』第一八―二〇巻におけるディアドコイ史の史料は唯一ヒエローニュモスに求められると極論した。しかし、こうした見方が行き過ぎであることは、J・ザイバートも疑問を投げ掛けたように、すでに指摘されてきた通りである。K・ローゼンは第二次伝承のなかから、政治的文書を詳細に取り上げ、ヒエローニュモスの記述の原形を引き出そうとした(3)。このあと、J・ホーンブローワーが従来の研究成果を踏まえて、彼女の緻密な見解を提示し、またG・A・レーマンは研究史を概略し、ヒエローニュモスのラミア戦争についての見方を考察している(4)。

## 一　ヒエローニュモスの経歴について

ヒエローニュモスについて分かっている史料は、前述のように僅かしかない。しかし、それが断片的であっても、同時代史を著した彼の立場を考えるうえで重要な手掛かりとなる。ヒエローニュモスの生年は不詳である。彼は長じて、エウメネースと行動を共にし、エウメネースの死後はアンティゴノス朝の祖アンティゴノス（一世）・モノプタルモス、デーメートリオス（一世）・ポリオルケーテース、アンティゴノス（二世）・ゴナタスに仕えた。そして、一〇

四歳になってもまだ達者であったとされている（T 2=[Lukian.] Macrob. 22）。

そこで、もう少し経歴に立ち入ってみることにする。ヒエローニュモスはカルディアのエウメネースの友人で、この都市の市民といわれ（T 4=Diod. XVIII, 50, 4）、またエウメネースの方はカルディアの一ヒエローニュモスの息子とされている（Arrianos, Ind. 18, 7）。ギリシア人の間では、孫が祖父の名を継ぐ習慣があったことから、ここにいう一ヒエローニュモスの孫が史家ヒエローニュモスとすれば、この史家とエウメネースは甥とおじの関係になる。もし、そうであるとすれば、多分エウメネース（生年、前三六〇年頃、没年の前三一六／五年には、四五歳）より後で生まれたとみてよかろう(5)。このような関係から、ヒエローニュモスのエウメネース贔屓の理由が見出せるのである。

したがって、ヒエローニュモスは、アレクサンドロス大王の書記官長であったエウメネースの下で、東方遠征に参加したのではないか、という見方もできる。アッピアーノスはアレクサンドロス大王が決してカッパドキアを通過しなかったという、ヒエローニュモスの主張を引用している（F 3=Appian. Mithrid. 8）。この表現は、ヒエローニュモスが東征に参加した経験から来るものであろうか。また、ディオドーロスによれば、エウメネースはアレクサンドロス大王の没後、カッパドキアの太守に配されたが、そこは征服して獲得しなければならない地域であった、と表現している（Diod. XVIII, 3, 1）。このディオドーロスの表現もヒエローニュモスに由来するとすれば、先のアッピアーノスの記述と合わせて、ヒエローニュモスはエウメネースの功業を顕すために、アレクサンドロス大王が支配しえなかった地域を征服した、と述べたのかもしれない。ただし、ここで注意すべきはカッパドキア地域の地理事情、それにこの地域の政情の変化なども考慮に入れる必要があるということである(6)。

エウメネースはアレクサンドロス大王没後の王家擁護派の立場に属し、アシアで奮闘した。そのエウメネースの使節として、ヒエローニュモスはマケドニアのアンティパトロスと交渉し（T 3=Diod. XVIII, 42, 1）、またアシアにおけるアンティゴノス・モノプタルモスと会談を持つなど（T 4=Diod. XVIII, 50, 4; Plut. Eum. 12）、エウメネースの

信頼をえていた。ところが、前三一六年にエウメネースはアンティゴノス・モノプタルモスとガベーネーで戦って敗れ、後に殺害された。また、エウメネースの陣営にいたヒエローニュモスは重傷を負い、捕われた。

しかし、ヒエローニュモスはアンティゴノス・モノプタルモスに親切に迎え入れられたので、その信義に応え、仕えることになった（T 5＝Diod. XIX, 44, 3）。ここに、エウメネースとアンティゴノス家をいかに描写するかが、史家ヒエローニュモスの課題となる。このあと、彼は死海からアスファルト収拾の監督を命じられているが、その作業はアラブ人の妨害によって取り止められている（T 6＝Diod. XIX, 100, 1-3）。このとき、彼はコイレー・シュリア地域の統治を委ねられていたのかもしれない（F 6＝Joseph. c. Apion. I, 213-4）。前三〇一年、アンティゴノス・モノプタルモスがイプソスの戦いで戦死したために、強大なアンティゴノス帝国は崩壊した。このとき、ヒエローニュモスはアンティゴノスの陣営にいたのであろう（cf. [Lukian.] Macrob. 10）。この後、デーメートリオスがテーバイの反抗を鎮圧すると、ヒエローニュモスはボイオーティアーの総督に派遣されている（T 8＝Plut. Dem. 39, 1-2）。

ヒエローニュモスは、デーメートリオスの王権を継ぎ、マケドニア支配を安定させたアンティゴノス・ゴナタスの下で晩年を送ったとおもわれ、一〇四歳になってもまだ達者であったといわれていることは、すでに述べた。彼は晩年になっても、著述、または校訂に力を注ぐ余裕を持っていたであろう。アンティゴノス・ゴナタスの名声もヒエローニュモスの筆致によるものとみてよい。パウサーニアースはヒエローニュモスに対しては辛辣で、彼が違ったことを書いているのも、王に仕えて、ご機嫌を取らねばならなかったからである、としている（F 15＝Paus. I, 13, 7）。また、それ以上にパウサーニアースはゴナタスやヒエローニュモスに嫌悪感を抱いていたようである（Paus. I, 13, 2-3 ; 9, 8）(7)。

## 二　ヒエローニュモスの著作の名称について

ヒエローニュモスの著作について、ディオドーロスは『ディアドコイ史』(T 3=Diod. XVIII, 42, 1)、ディオドーロスと同時代のディオニューシオスは『エピゴノイについて』(F 13=Dion. Hal. AR I, 5, 4)、ヨセフスは『ディアドコイ史』(F 6=Joseph. c. Apion. I, 213-4)、とそれぞれ表現している。なお、後代の辞典『スダ』では『アレクサンドロス以後の行業』とあげているが(T 1=Suid. s. Hieronymos Kardianos)、この表現は内容をいわんとしたのであろう。取り扱った内容の年代的下限は、ピュルロスのイタリア侵入(F 11; 12=Plut. Pyrrh. 17, 7; 21, 7)、その後スパルタでの敗死(F 14=Plut. Pyrrh. 27, 8)までを取り扱ったことは確かである。ディオニューシオスは、『エピゴノイについて』を書いたヒエローニュモスは私の知る限り、ローマ人の初期の歴史を取り扱った最初の史家である、といっている。これは、ヒエローニュモスがピュルロスを取り扱った際に、ローマ人の歴史に言及したことを仄めかしている。

ところで、ポントスのヘーラクレイア出身のニュムピスは、故郷のヘーラクレイア史を書いたが、その本編というべき『アレクサンドロスならびにディアドコイとエピゴノイについて』二四巻を著している[8]。その取り扱った年代の下限はプトレマイオス(二世)・ピラデルポスの死(前二四六年)までとおもわれる。彼とヒエローニュモスの著作活動は同時期とみられるが、彼の方が後で生まれている(約前三一〇年以前)。そこで、このニュムピスは、彼の著作の表題にみられるように、ヒエローニュモスの叙述を利用したのではないか考えられる。

以上から、大まかにいえば、ヒエローニュモスはディアドコイそしてエピゴノイと呼んだそれぞれの時期を取り扱ったとみられる。

しかし、ヒエローニュモスがそうした時期を取り扱ったとしても、その著作がどのような構成であったかは明らかでない。つまり、何部からなり、そしてどの時期で区切るかが問題である。たとえば、特徴ある見方としては、イプソスの戦いまでのディアドコイ史、そのあとコルペディオンの戦いまでのエピゴノイ史、別にピュルロスの歴史といった区分であるが(9)、それに対して、多くの場合はディアドコイ史とエピゴノイ史の二つからなるとする考え方である。ことに、O・ミュラーは、ディアドコイ史とエピゴノイ史はそれぞれ独立したものとみる。そして、ディアドコイ史を二つの局面に分ける。最初の部分はヒエローニュモスがエウメネースの影響下にあった時期で、その死にいたるまで（前三二三―前三一七／六年）とし、アレクサンドロス大王没後の帝国一体性を支えようとした動きと捉える。もう一つの部分は、その後ヒエローニュモスがアンティゴノス・モノプタルモスに仕えてから、イプソスの戦い（前三〇一年）までで、この時期はアンティゴノス・モノプタルモスによる帝国形成の動きとみる。ヒエローニュモスにとって、イプソスの戦いは災厄であり、帝国形成の理念は、ついに瓦解したとする。このディアドコイ史が、前二九〇年代に執筆された。そして、ヒエローニュモスはエピゴノイ史を新しい歴史の展開と受け止め、彼がアンティゴノス・ゴナタスの行動を通して考察したように、政治的、領土的安定を指標する時期に入ったとする。このエピゴノイ史は前二六〇年代に執筆された(10)。これがミュラーの見方である。

## 三　ヒエローニュモスの著述の特徴

ヘレニズム時代に著された多くの著作が散逸したことはよく知られている。F・W・ウォールバンクは、この時代の目立った、王、民族、地域等、特別のテーマを取り扱った四六人の著述家について、それらの作品がことごとく失われていることを指摘しながら、多くの作品が散逸した理由を次のように説明する。著作の多くがその当時のギリシ

ア語のイディオム、つまりコイネーで書かれていたため、後の学識者や筆写人にとって魅力がなかった（これは後のアッティカ主義の文体の復興を指しているのであろう＝筆者）。また、後世に伝わるに十分なコピーが作成されなかったため、ことに地方史家の作品などが失われてしまった。それに何よりも、多くの作品の全編やその長さが並の読者に疎んじられたこと、それに摘要、抄本、さらには目録だけといったものが流布し、一種の文学的グレシャムの法則が作用する状況をつくりあげた。それゆえ、見劣った作品が原作を流通から締め出し、次いで、ついにはその存在さえも締め出してしまった(11)。

ハリカルナッソスのディオニューシオスによれば、ヒエローニュモスの歴史は非常に長く、また大部でもあるので、誰もそれを最後まで読まないだろう、と表現している（T 12＝Dion. Hal. De comp. verb. 4, 30）。このことは、まさにいまあげたような事情によるものといえよう(12)。しかし、ディオニューシオスはヒエローニュモスの「エピゴノイ史」を知っていたわけであり、また彼と同時代のディオドーロスは『文庫』執筆のためにヒエローニュモスの作品を十分に利用し、イプソスの戦いにいたるまでの「ディアドコイ史」を書き残しており、そのあとの「エピゴノイ史」の部分が断片であることは惜しまれる。それに、トログス・ポムペーイウスも『ピリッピカ』においてヒエローニュモスの叙述を活用した(13)。また、二世紀半ば頃には、プルータルコスが『エウメネース伝』(14)、『デーメートリオス伝』、『ピュルロス伝』において、またアッリアーノスが『アレクサンドロス後の事跡』一〇巻において(15)、それぞれ利用したことは確かである。

ことに、アッリアーノスの『アレクサンドロス後の事跡』は、九世紀のポティオスの要約にみられる呼び方であって、もとの書名は分かっていないが、取り扱った範囲は次のようである。アレクサンドロス大王の死後の軋轢から、ペルディッカスの統帥権の掌握、それに続くギリシア、アシア、キュレネーにおける出来事、内紛の拡大、ペルディッカスの死、トリパラデイソスの会談と諸将によるサトラップ領支配の分掌、アンティパトロスのヨーロッパ入

りまで、前三二三―前三二〇年の間を扱っている。これは、おそらくアッリアーノスが『アレクサンドロスのアナバーシス』、『インディカ』を著した後、アレクサンドロス帝国の決定的な分裂、すなわちディアドコイによる新しい王国形成の端緒を取り上げ、そこにみられる政策、戦術等の問題点の分析を試みたとおもわれる。この作品の引用が他にもみられることは、それがかなり重視されていたからであろう[16]。

そこで、いまあげたディオドーロスの記述とアッリアーノスのそれを比較してみるとき、前者はアレクサンドロス大王の死後から、イプソスの戦いのまえまで（前三二三―前三〇二年）、この二一年間を三巻（第一八―二〇巻）に収め、第一八巻だけで七年間を扱っている。これに対して、アッリアーノスの場合はアンティパトロスのヨーロッパ入りまで（前三二三―前三二〇年）、この三年間を一〇巻に仕上げている。この点、アッリアーノスは、おそらくヒエローニュモス以外の史料を用いたことも考えられる[17]。しかし、それにしても両者の分量差の開きが大きいことから、ディオドーロスはヒエローニュモスの記述をかなり省略していると推定される[18]。

また、ヒエローニュモスの歴史記述の下限がピュロスの死（前二七二年）、あるいはそれ以後、ポントス王ミトリダテース一世の事績までを取り扱ったとすれば（F 3＝Appian. Mithrid. 8; F 7＝[Lukian.] Macrob. 13）、年代上、前二六六年以降に及んでいることになる[19]。つまり、彼の歴史はアレクサンドロス大王の没後から、五十数年間を取り扱ったことになる。ホーンブロワーは、ポリュビオスの『歴史』四〇巻（前二二〇―前一四六年）や、また前三世紀の幾つかの史書にみられる分量から推定して、ヒエローニュモスの歴史の構成は、およそ二〇―三〇巻ではなかったか、とみている[20]。

ヒエローニュモスの歴史は同時代史という特色をもっている。そこで、彼の史料の収集について一瞥しておきたい。彼がアレクサンドロス大王の書記官長であったエウメネースの下にいたのが、早い時期からであったとすれば、各種の文書に触れる機会が多かったに違いない。また、アンティゴノス家に仕えてからも、パウサーニアースに宮廷

史家と皮肉られているように、同じくこの王家の資料を十分に利用できたであろう。こうした境遇が、彼をして歴史を書かせたのかもしれない。K・ローゼンによれば、ヒエローニュモスから引き出せる文書、つまり条約、都市の決議文、王の命令、王の個人的書簡等は七四を下らないとしている[21]。

ヒエローニュモスが、早くから歴史叙述の意図をもって、克明な覚え書きを取っていたか、どうかについては分からないが、ディオドーロスの叙述から、戦闘や人物評価に生き生きとした幾つかの描写が見受けられる。これは、彼の経歴からいって、自らの体験から来たるものであることは、いうまでもない。実見以外の事柄についても、彼の身近な同僚や友人、それに傭兵から種々の情報をえ、そうした伝聞も大いに利用したであろう。ラミア戦争（Diod. XVIII, 8-18）、アレクサンドロス大王の王庫の財貨を掠めたハルパロスが、最後に故郷のキュレネーで殺害されたこと、またプトレマイオスのキュレネー征服（Diod. XVIII, 19-21）、エジプトに遠征したペルディッカスの最後（Diod. XVIII, 33-36）等その他が考えられる。もっとも明らかなことは、ピュルロスのイタリア遠征によるローマ人との戦いの話である。ヒエローニュモスが、イタリアに渡ったとは推量し難い。なお、ディオニューシオスによれば、ヒエローニュモスはローマ古史を記した最初のギリシア人とされているが、ヒエローニュモスが用いたローマに関する史料がピュルロスにまつわる伝聞であったか、あるいは別の史料であったかは、不明である[22]。

また、ヒエローニュモスの史風について一瞥するならば、ディオドーロスの記述からかなりのものを読み取ることができる。その詳細については、ここでは省略することにするが、一、二の点について指摘しておきたい。ディオドーロス『文庫』一八巻の最初において、アレクサンドロス大王没後の帝国の地理事情の説明がなされている[23]。これがヒエローニュモスに由来するとすれば、彼はヘレニズム時代初期からの歴史記述の特徴としての地誌、民族誌を冒頭においたとも考えられる。なお、アテーナイオスが、ヒエローニュモスはマケドニア王ペルディッカスをあげていると表現しているが（F 1＝Athen. V, 58, p. 217, DE）、これを述べたのがカルディアのヒエローニュモスであるとす

れば[24]、彼はアレクサンドロス大王以前のマケドニア王家についても触れたのではないかと考えられるのである。したがって、これらからいえることは、トゥーキュディデースが、彼の『歴史』において、第一巻に「前五十年史」を加え、ポリュビオスも『歴史』四〇巻のうち、最初の二巻を導入部に当てた、そうした例に類似していたのではないか、ということである[25]。

## おわりに

ヒエローニュモスの歴史は、いわばエポロスやテオポムポスの歴史を継ぐものとする見方もできよう。後者の二人の歴史はピリッポス二世までを取り扱っている。その後のアレクサンドロス大王の記録については、ヒエローニュモスの活躍していた時期、多くの者がすでに発表し、執筆していた。それゆえ、ヒエローニュモスにとっては、アレクサンドロス大王没後のヘレニズム世界の形成、つまりヘレニズム時代初期の歴史を同時代人の史眼でもって叙述することにあった。この時期が支配権の交替とヘレニズム王国の成立にあったとすれば、彼の歴史は当然、政治的変遷に重きがおかれ、また政治、軍事に関心をもつ読者を念頭において執筆されたであろう。したがって、そこには多くの公私にわたる相当数の文書史料が挿入されていたとおもわれる。この点において、後にアッリアーノスがアレクサンドロス後継史を書いたとき、ヒエローニュモスを十分に活用したと考えられるのである。もちろん、ヒエローニュモスの人物評も確かであったであろう。また、この点においても、プルータルコスその他による人物伝の格好の史料とされたのである。

したがって、ディオドーロスが、彼の『文庫』、いわゆる世界史を残そうとしたとき、アレクサンドロス大王以後のヘレニズム史の展開については、まずヒエローニュモスの叙述を主要史料に用いなければならなかった。このディオ

ドーロスの記述を通して見受ける限り、ヒエローニュモスはギリシア人の自由については冷淡であった。というのも、ディアドコイ期を経て、くレニズム王国の定着にむかうとき、ヒエローニュモスはくレニズム君主の支配を重視したからである。とりわけ、マケドニアとエーゲ海域の安定を目指したアンティゴノス・ゴナタスの政策に共感したと考えられる。この点、彼がパウサーニアースに宮廷史家として誹謗される理由があったとみてよい。

ヒエローニュモスの著述がポリュビオスの『歴史』につながるものであることは、容易に頷けるのであるが、ポリュビオスはなぜかヒエローニュモスの名前をあげていない。暗黙のうちの引用なのか、あるいは彼の著述を普遍史と認めなかったためであろうか。一つの問題といってよかろう。

註

(1) Jacoby, F., *FGrH*, no. 154. ヤコビは、最後の断片（F 19）は疑わしいとする。

(2) 一九七九年までの研究史の要約については、Seibert, J., *Das Zeitalter der Diadochen* (Erträge der Forschung Band 185), Darmstadt (1983), 1-9. をみよ。Nitsche, W., König Philipps Brief an die Athener und Hieronymos von Kardia, *XI. Jahresbericht des Sophien-Gymnasiums in Berlin* (1876), 1-33; Reuss, F., *Hieronymos von Kardia. Studien zur Geschichte der Diadochenzeit*, Berlin (1876); Droysen, J. G., Zu Duris und Hieronymos, *Hermes*, 11 (1876), 458-465.

(3) Jacoby, F., *RE*, VIII, 2 (1913), 1540-1560; Schubert, R., *Die Quellen zur Geschichte der Diadochenzeit*, Leipzig (1914); Brown, T. S., Hieronymus of Cardia, *AHR*, 52 (1947), 684-696; De Sanctis, G., *Ricerche sulla storiografia siceliota*, Palermo (1958), 95ff.; Seibert, J., *Untersuchungen zur Geschichte Ptolemaios' I*, München (1969), 55ff.; Rosen, K., Political Documents in Hieronymus of Cardia (323-302 B. C.), *Acta Classica*, 10 (1976), 41-94.

(4) Hornblower, J., *Hieronymus of Cardia*, Oxford (1981); Lehmann, G. A., Der "Lamische Krieg" und die "Freiheit der Helenen": Überlegung zur Hieronymianischen Tradition, *ZPE*, 73 (1988), 121-149

(5) ビルーズは、ヒエローニュモスはアレクサンドロス大王（生年、前三五六年）と同じ頃に生まれたと推定している。Billows, R. A., *Antigonos the One-Eyed and the Creation of the Hellenistic State*, University of California Press (1990),

390-391.

(6) Hornblower, J., *op. cit.*, 239-240.

(7) Cf. Lund, H. S., *Lysimachus. A study in early Hellenistic kingship*, London and New York (1992), 13-17.

(8) Jacoby, F., *FGrH*, no. 432 (T 1=Suda s. v. Nymphis).

(9) Fontana, M. J., *Le lotte per la successione di Alessandro Magno*, Palermo (1960), 257.

(10) Müller, O., *Antigonos Monophthalmos und 'das Jahr der Könige'*, Bonn (1973), 7-13; cf. Hornblower, J., *op. cit.*, 79, 174.

(11) *CAH*, 2nd Edition, Vol. VII, 1, The Hellenistic World, (1984), 1. (F. W. Walbank)

(12) ヒエロニモスの文体と言葉については、Hornblower, J., *op. cit.*, 262-281.

(13) Richter, H.-D., *Untersuchungen zur hellenistischen Historiographie. Die Vorlagen des Pompeius Trogus für die Darstellung der nachalexandrischen hellenistischen Geschichte (Iust. 13-40)*, Frankfurt am Main (1987), 33-38.

(14) ラテン語で早く「エウメネース伝」を著したのは、コルネリウス・ネポスであるが、彼はヒエロニモスを史料を用いたであろう。ネポスによると、ヘーラクレイデスはエウメネースの描写について、ティモテーオス、アルタルコスとの類似性が認められる（Nepos, Eum. 5, 4-5; Diod. XVIII, 42; Plut. Eum. 11）。

(15) Jacoby, F., *FGrH*, no. 156; Roos, A. G. et G. Wirth, *Flavivs Arrianvs, II, Scripta Minora et Fragmenta*, Leipzig: Teubner (1968), TA META AΛEΞANΔPON.

(16) 第七巻の箇所に当たる部分が二断片の羊皮紙から（*FGrH*, no. 156, F 10=Roos・Wirth, *op. cit.*, Fr. 24-25）、またエウメネースとネオプトレモスの戦いを取り上げたオキュンコス出土のパピルス（*PSI*, XII, 1284）から知られている。

(17) ステッター氏は、アッリアーノスはプトレマイオスの記述を用いて『アナバーシス』を書き上げたが、このプトレマイオスがアレクサンドロス大王後の歴史を書いていたと想定すれば、アッリアーノスは、またそのプトレマイオスの記述を利用したのではないかとみる。Stadter, P. A., *Arrian of Nicomedia*, The University of North Carolina Press, Chapel Hill (1980), 144-152; cf. Hammond, N. G. L. and F. W. Walbank, *A History of Macedonia, III, 336-167 B. C.*, Oxford (1988), 95-98. (N. G. L. Hammond)

(18) Cf. Simpson, R. H., Abbreviation of Hieronymus in Diodorus, *AJPh*, 80 (1959), 370-379.

(19) Hornblower, J., *op. cit.*, 243-245.

(20) *Ibid.*, 99-100.

(21) Rosen, K., *op. cit.*, 45-94 ; Hornblower, J., *op. cit.*, 131.

(22) プリニウスによれば、ローマ人を最初に注意深く取り上げた異国人は、テオプラストスであるという (Plin. *NH*, III, 57)。ギリシアでは、前四世紀後半において、ローマについての知識がかなりあったとみてよかろう。Fraser, P. M., *Ptolemaic Alexandria*, Oxford (1972), I, 763-767 ; Hornblower, J., *op. cit.*, 140-143, 248-250 ; Gruen, E. S., *Culture and National Identity in Republican Rome*, Cornell University Press (1992), 27.

(23) その他、ディオドーロスは『文庫』第一八巻においても、アレクサンドロス大王に関する事柄を記述している。その一つにアレクサンドロスの覚書なるものをあげている。それはアレクサンドロスの最後の計画と通称されているもので、軍船一〇〇〇隻を建造し、カルタゴ人、リビア人、イベーリア人、それにシケリアにいたる沿海を攻撃し、そしてリビア沿岸から、ヘーラクレースの柱にいたるまで道路を建設、また大遠征に必要な海港の設置、その他を含む遠大な計画であった (Diod. XVIII, 4, 4-6)。これがヒエローニモスの記述に基づくか、どうかについては論議されてきたところである。諸家の見解ならびにディドーロスのヒエローニモス史料に由来するとする見方については、Bosworth, A. B., *From Arrian to Alexander. Studies in Historical Interpretation*, Oxford (1988), 185-211.

(24) Hornblower, J., *op. cit.*, 80, 238-239.

(25) ディオドーロスの記述にみられるヒエローニモス利用の最初について、ホーンブロワーは、クトリアの反乱 (Diod. XVIII, 7, 1)、ペルディカスはアレクサンドロス大王没後の後継者選び (Diod. XVIII, 2, 1) からとする。Hornblower, J., *op. cit.*, 87-97 ; Hammond, N. G. L. and F. W. Walbank, *op. cit.*, 98. (N. G. L. Hammond)

——文学部教授——